

稱讃

二八二号

二〇二六年六月一日発行



発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

メール shousanji@festa.ocn.ne.jp

まことのこころなりけるを 善悪の字しりがほ
はおそろごとのかたちなり」と詠われてお

それ、八万の法蔵をしるといふとも
後世をしらざる人を愚者とす。
たとひ一文不知の屁入道なりとい
ふとも、後世をしるを智者とすとい
へり。

〔御文章〕五帖二 蓮如上人著
〔註釈版聖典〕二一八九頁

親鸞聖人は、『御消息』では「故法然聖人は、
「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひし
ことを、たしかにうけたまはり候ひしうへに、
ものもおぼえぬあさましきひとびとのまゐり
たるを御覧しては、「往生必定すべし」とて、笑
ませたまひしをみまゐらせ候ひき。文沙汰し
て、さかきかしきひとのまゐりたるをば、「往
生はいかがあらんずらん」と、たしかにうけた
まはりき。」と仰り、「和讃（『正像末和讃』）で
も、「よしあしの文字をもしらぬひとはみな



ります。

『御文章』の「愚者」と「智者」と親鸞聖人の「愚者」と「智者」は意味あいが入れ替わっているようにも受け取られるのですが、同じことを仰っていると思うのです。

現代人の私たちは、仏教における「八万の法蔵」と言われる程の経教を知っているわけではありませんが、なまじつかに科学的知識を持ち文字も読め、人生経験もある知識人と自負している。親鸞聖人の言い方から言えば、「善人」「智者」かもしれないですが、蓮如上人の言い方では、そちらの方が、「愚者」であると言うことになりませんが、智者ぶり、善人ぶる、知識人とか賢ぶっている私たちは、お浄土を知らない、「人間死んだらゴミになる」と悟ったつもりでいるのです。

お念仏を伝えてきてくださった方々（善知識）から、お浄土に往生する事を聞き続けて参りましょう六月二七日（土）十四時、稱讃寺で、「永代経法要」をお勤めします。それぞれの先人を通して、今、お浄土から、阿弥陀さまの救いのはたらきが届いていることを聞き思いをめぐらしてみましよう。お参りを心よりお待ち申しあげます。

2026（令和8）年度 稱讃寺門信徒会費 年会費 6,000円

①城北信用金庫一ツ家支店

名 義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会
代表 北村信也
口座番号 普通 6176051

②ゆうちょ銀行 店名四四八

名 義 キタムラ シンヤ
口座番号 普通 2374851

特集 金子大榮師のご領解 ㊦

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

二 弥勒の位

本文 王日休はいく、われ『無量寿経』をきくに、衆生この仏名をききて、信心歡喜せんこと乃至一年せんもの、かのくにむまれんと願すれば、すなはち往生をえ、不退転に住すと。不退転は梵語にはこれを阿惟越致といふ。『法華経』にはいはく、弥勒菩薩の所得の報地なり。一念往生すなはち弥勒におなじ。仏語むなしからず。この『経』は、まことに往生の徑術。脱苦の神方なり、みな信受すべし、と。已上

口語訳

王日休はいく。われ聞く『無量寿経』に「弥勒仏の名を聞きて、信心歡喜す。一念に、彼の国に生れようと願えば、即ち往生を得て不退転に住す」と。その不退転とは梵語にこれを阿惟越致あゆいおちちといい、『法華経』に聖者弥勒の境地とせるものである。されば一念の往生はすなわ便ち弥勒と同じこととなる。仏語に

虚いつわりはない。しかれば此の『経』はまことに往生の徑術ちかみちであり、脱苦の神方かみわざであると信受すべきである。

一

信心の行者は弥勒と同じ位となる。ということとは親鸞にとりて深いよろこびであった。そのことは仮名書にも消息文にも繰り返されているから、志を同じくせる法友の人びとの間にも、つねに言い交わされたことであろう。弥勒は五十六億七千万年の後に、釈尊に次いで仏陀の名告をあげることになっている菩薩である。その弥勒はすでに無量劫の修行をして、いまようやく、必ず仏になる身と定まる位を得たのである。その位は等正覚(正覚(ほとけ)と等し)といい、また補処(仏の位処に補せられる)という。そこまですなわち正定聚であるが、その七千万年の後と期せねばならない正覚(ほとけ)の境地である。しかるに信心の行者は、この世の一生を終るときに大涅槃と証せしめられるのである。そこにはまことに尽すことのできぬよろこびがあるのである。

しかし、この事実を証明する浄土教の経文はない。『大無量寿経』には信心歡喜するものは不退転に住すと説かれている。その不退転に住するものは、すなわち正定聚であるが、その正定聚を『如来会』では等正覚と説かれている。しかれば住不退転と正定聚と等正覚とは

別なものではないことはあきらかである。しかしてその等正覚は補処の位であるから、弥勒を思いあわされることは当然のことでもあらう。されどあきらかに信心の行者は弥勒と同じとは説かれていない。それが王日休によりて開顯されたのである。そこに親鸞がとくに王日休の説にしたしまれた意味があるのである。

したがって、ここにあげられた王日休の説も『無量寿経』の住不退転と『法華経』の阿惟越致を思い合わせられたところに重点があるのである。されどさらに立ち入りて思えば、特に「われ『無量寿経』をきくに」といって、「衆生、この仏名を聞きて信心歡喜せんこと乃至一念せんもの、彼の国に生ぜんと願すれば、即ち往生を得、不退転に住す」とつまびらかに経文をあげてあることにも深い感銘があるのであらう。これに対して『法華経』の説は、「寿量品」に弥勒が「われら阿惟越致に住すれども」如来の寿命を量りしることができないと語っているものである。その対照において「一念の往生すなはち弥勒に同じ」と説かれたのであった。そこによるこびのつきぬものがあるのである。

二

ここに聖道の修行と浄土のきとりとの別があるといわれねばならない。仏道は自覚・覚他であるといわれている。しかして自覚なきものは覚他することはできないにちがいはないが、また覚他しないかぎりには自覚に安んずることはできない。もし覚他することなくして、自覚に

止まることあらば、それは空閑をたのしむ隠者にすぎぬものといわねばならぬのであろう。真に自己即仏とさとするものは、そのころからいよいよ利他の修行をこころぎすものでなくてはならない。その修行なくしては、たゞに煩惱即菩提と説くことは、天魔のころである。迷える衆生のあるかぎり、みずからをさとれりということができない。しかるに迷える衆生はかぎりがないのであるから自覚ということも、畢竟は成就せぬこととなるのではないであらうか。

しかし修行の功つもれば、この自覚と覚他との内面的統一の境地に達するかもしれない。それが不退転地であり、阿惟越致である。すなわち弥勒の到達せる「報地」である。修行の果報として得たる境地である。したがってその境地こそ仏道を求むるものの理想であるといわねばならない。しかれば親鸞もその発心のはじめからこの不退転地を求めていたのであろう。されどそれは容易に達しがたき境地であることが知られていた。それが親鸞をして浄土の教えへと帰入せしめたのである。

浄土の教えによれば、自覚も覚他も、如来の本願力の廻向として、われらの行信の上に成就せられる。その自覚を往相とし、覚他を還相とすることにおいて二種の廻向と説かれてはいるが、「南無阿弥陀仏の廻向の、恩徳広大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せしめられる。したがって二種の廻向は念仏のうちに成就せられている。さればこそ信

心の行者は等正覚の位となり弥勒に等しというよろこびがあるのである。

三

ここでわたしは、教化ということの問題としてみたい。自信あるものは、また他を教化して信に入らしめるべきものである。ということが、一般の常識であり、また自然の感情ともいふべきものであろう。されどそこには自はきとれるものであり、他は迷えるものであるということが予想されている。したがって教化者は、自身がある高みにおいて、他を見下しつつ語ることになるようである。それでよいのであろうか。それは教化者によりてつねに反省されねばならないものである。その反省こそ自覚・覚他の聖道というものであろう。

翻つて教化される者の立場になつて自身を思う。その教化せられる身を転じて教化する身となるということは容易ではない。煩惱の生活を離れることのできない身にとっては、つねに善知識を求むる他ないものである。人間の一生は偏に教化せられねばならぬものとして運命づけられているのではないであらうか。しかもなお、自信のよろこびを他にも及ぼしたい願いが止むに止まらないものとすれば、そこにあるものは、ただ自他の信・不信を分別することなく、ともに聞法し教化を受けることその他ないのであろう。それが浄土教における二種廻向のよろこびである。

その聖道的なる自覚・覚他の分別から、浄土

教の往相の行信へと廻心せるものが親鸞の身証であつた。「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ」という表白には、教化の断念がある。しかるに不思議にも、その断念における往相の聞信が、内に還相利他の徳を成就せられてあるのである。それはおそらく教化を願いつつ、それを断念せざるを得なかつた親鸞でなくては経験することのできない深い感銘であつたのであろう。『正像末和讃』はこの感激において作られた。そこに弥勒と同じということも歌われているのである。

ここではとくに仏力と願力とを一応わけていただかねばならない。仏のさとりをひろくことは仏の力によることである。したがって菩薩が仏になるということ、仏が菩薩になるということとは別ではない。仏が仏の行をなすことが菩薩行である。この意味においては聖道といえども絶対仏力によるものというを得るのであろう。されど、その思念すること、すでに教化者の立場である。ただ教化を蒙る他なき身において感知せられる仏力は、その絶対的なものではなくて、煩惱具足の人間生活を大悲しての本願力である。その本願力によりて浄土の往生を遂げしめられる。しかしその浄土こそはすなわち自他平等に大涅槃を証せしめられる境地である。

四

こうしていまさらに「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がため

なりけり」ということばをおもわしめられる。この感銘の深い表白は『歎異抄』にのみありて『教行信証』には、それに相当するものが見当たらない。『教行信証』の「信巻」に繰り返されているものは、兆載永劫の修行の経文である。しかしそれがまたとくにふかい感銘をあたえているのである。しかれば両者のあいだには、なにか重点を異にするものがあるのであろうか。

されど翻つて思うに、親鸞にとりては、「如来、一切苦悩の群生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じたまひし」というも、「弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫をへたまへり」というも、「そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなき」の他ないものであったのであろう。永劫の修行というも本願のところでである。正覚の阿弥陀仏というも本願のかたちである。それをそれぞれ分別することは、畢竟、これ経文に執われている知識妄にすぎぬであらう。『大無量寿経』上下二巻「我聞如是」より「靡不歡喜」にいたるまで、ことごとくこれわれら一人のためであった。さればこそ、「如来の本願を説いて経の宗致とす」と領解せられたのである。

しかし、その本願を説く経の体は「仏の名号」であり、南無阿弥陀仏である。これによりて「南無の言は帰命なり、帰命といふは本願招喚の勅命なり。発願廻向といふは、如来すでに発願して衆生の行を廻施したまふころな

り。即是其行といふは即ち選択本願これなり」と領解せられたのである。その文字を分別すれば、「招喚の勅命」は正覚の阿弥陀の声であり、「衆生の行を廻施したまふころ」は永劫の修行によるものであり、「選択本願」は五劫思惟のころということとなるようである。されどその分別は教学のはからいにすぎぬのであろう。親鸞の領解においては、ただ本願のころ一つであった。

五

これで信心の行者は弥勒と同じという意味はほぼ尽くしたようである。されどいま一つ推求してみたいことは弥勒という名指しである。ただ等正覚の位となるといつているのではない。弥勒と等しくいつているのである。しかればその名指しのうえに特別の感激があるのであろう。

そこに思い合わされることは、仏教の歴史のうえに、西方願生と兜率上生との信仰がならび行われていたということである。弥陀釈迦をうしなえる教徒は、現に西方に在す阿弥陀の浄土への往生を願うが、あるいはついで仏陀と名告られることに定まつて今兜率天に説法しつつある弥勒菩薩の会下へと願われたのであった。その信仰は親鸞の当時も行われていたということである。しかれば弥勒の名は、けつして観念的のものではなかったのであろう。親鸞はその弥勒と自身を思い合わせたのである。

されどその思い合わせの感情内容はいかなる

ものであったかは、測りしることができない。信心の智慧よりいえば、兜率上生と西方願生とは異質的なものであるということもいわれるであらう。それは今日のわれらにとりてはきわめて明了なことである。したがってそれがまた親鸞の信境であったに相違ない。されどまた素直なころにおいて聖道の修行を尊重し、その理想的人格を弥勒に見出してのうえで、念仏の信心のよろこびを感じられたものとすることも自然のようにおもわれることである。

〈補記〉

王日休(おうにつきゅう)は宋朝の人で竜舒(りゅうじょ)に生まる。国学進士とまでなった儒者であるが、後に浄土門に帰し願生を勧めた。その著作として竜舒の『浄土文』といわれているもの十二巻ある。ここに引用されたものは、その第十巻にあるものである。

しかしこれは王日休自身の語ではなく、『浄土文』に跋を書いた唯心居士、周葵の語である。それも「仏語、虚しからず、みな信受すべし」と結んであつて、その間の「この経はまことに往生の徑術、脱苦の神方なり」の句はない。それは親鸞によりて挿入されたものである。

ここにおもわれることは、親鸞がいかに『王日休』に敬意をもち、そのことばとして弥勒等同の説に感銘したかということである。

浄土真宗のビハークアを考える

14 「如来の子」としての自覚

阿闍世が、釈尊を讃嘆している詩のなかに、

「如来一切のために、つねに慈父母となりたまへり。まさに知るべし、もろもろの衆生は、みなこれ如来の子なり。」

(信巻 註釈版聖典288頁)

〈現代語訳〉

「如来は、すべての人々のために、つねに慈悲の父母となつてくださいます。よくよく知るべきです。あらゆる人々はみな如来の子なのです。」

という一節がある。この「仏の子」としての自覚を

阿闍世がもったということは、今まで、父頻婆沙羅と母韋提希との間で、怨みと不信を重ねたり、反面、愛情を感じたりしてきた世界から、一歩踏み出しているともいえるだろう。すなわち、火宅のような城の中で生まれ、この世界における頻婆沙羅と韋提希の子でもあった阿闍世が、その愛憎違順のとらわれの世界を超えて、限らない慈愛に満ちた「如来に願われた子ども」となったということである。

「如来に願われた子」となったという阿闍世の自覚は、自らが、宇宙的な広がりをもった、智慧と慈悲の世界に生かされているという実感をもちえた存在となったことを示唆している。また同時に、阿闍世のみでなく、すべての人間にとって、仏がいつも、慈しきをもった父母であると自覚させたのである。

このような仏の慈愛について、親鸞は、こう記している。

「二つには念ずべし。慈眼をもつて衆生を視そなはずこと、平等にして一子のごとし。ゆえにわれ極大慈悲母を帰命し礼したてまつる。」(行巻源信『往生要集』引用。註釈版聖典184頁)

「敬ひて一切往生の知識等にまうさく、多きにすべからく慚愧すべし。釈迦如来はまことにこれ慈悲の父母なり。種々の方便をして、われらが無上の信心を發起せしめたまへり」(信巻善導『般舟讚』引用。註釈版聖典275頁)

と記され、また親鸞は『浄土和讃』に次のように書かれている。

「超日月光この身には
念仏三昧をしへしむ
十方の如来は衆生を
一子のごとく憐念す」

(『浄土和讃』(14) 註釈版聖典577頁)

かけがえない一人子のように、仏は生きとし生けるものをわけへだてなく愛し、護り育てるということである。この「一子地」にも「如来の子」の意味がよく示されている。

また、親鸞は、煩惱罪濁にまみれた凡夫が、仏の広大な願いに受け容れられ、救われていくことを、「海」と表現している。

『海』といふは、久遠よりこのかた凡聖所修の雑修・雑善の川水を転じ、逆謗闡提・恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実・恒沙万徳

の大宝海水と成る。これを海のごとくに喩ふるなり。まことに知んぬ、『経』に説きて「煩惱の水解けて功徳の水と成る」とのたまへるがごとし。」(行巻一乗海釈 註釈版聖典197頁)

汚れたさまざまな川の水が海に入れば、一味になるように、仏の本願は、凡夫や、聖者の修めた自力の善や、五逆・謗法・一闡提の暗闇に沈む煩惱の水を、真実功徳の海水と転じるというのである。海の譬喩は、すべてを受け容れるという、仏の願いの大きさと、いかなる罪をもそのまま真実に転じるという、仏の願いの力強さを示したものである。このように、この海の譬喩は、宇宙的なひろがりをもった、智慧と慈悲の世界を象徴している。さらに、親鸞は、本願一乗海の功徳をほめたうえで、自ら次のように記している。

「なほ嚴父のごとし、一切もろもろの凡聖を訓導するがゆゑに。なほ悲母のごとし、一切凡聖の報土真実の因を長生するがゆゑに。なほ乳母のごとし、一切善惡の往生人を養育し守護したまふがゆゑに。なほ大地のごとし、よく一切の往生を持つがゆゑに。」(行巻一乗海釈 註釈版聖典201頁)

生きとし生けるものを救うという仏の願い、悲願は、厳しい父のように、凡夫や聖人を教え導き、慈悲深い母のように、凡夫や聖人が浄土に生まれていく因を育み、乳母のように、善人も悪人も往生を願う人をすべて護り育て、大地のように、すべての人々の往生を支えるというのである。この文章にも端的に示されているように、仏の本願は、父のような厳しきも、母のような優しきも、乳母のような

わけへだてのなきも、大地のような揺らぎない支えも、すべて兼ね備えているということである。

したがって、阿闍世が、「如来の子」として生きるということは、かけがえのない一人子のように如来に願われて生きていくことを意味している。そして「如来の子」として生きるとは、阿闍世が、今まで父母に対して抱いてきた怨みと寂しき、愛と憎しみといったとらわれから解放されて生きることであり、両親に対して、本当の意味で、惜しみない愛情をもつことができるようになったともいえるだろう。阿闍世にとって、釈尊が、あたかも本当の父や母のような存在となったからこそ、阿闍世は、願われて生かされることの力強さを身にしみて感じることができた。人は本当に大切にされたとき、責任をもって努力する。すなわち、阿闍世は、怨憎の虚しさを超えて、あらゆる人々の幸せを願う心を育むことができたのである。

その意味において、阿闍世の「如来の子」としての自覚は、この世の「権威・厳しき」としての父性原理や、「甘え・ゆるし」としての母性原理を超えたものであり、真の意味で、わけへだてない宇宙的な慈愛と智慧にめぐみ、いのちあるすべてのものとの心の絆を育んでいくことのできる人格に成長したことを象徴しているといえるだろう。

結論 親鸞のみた王舎城悲劇の深層

以上、この阿闍世の悲劇と救いの過程について、時間をかけて考察してきた。最後に、この阿闍世の悲劇の考察を終えるにあたって、この悲劇に込められた深いメッセージを明らかにしたい。それは逆縁の意義である。

人生には、順縁と逆縁がある。順縁とは、世間の

道理や人倫にかない、自己と相手の両方にとって安らぎをもたらすような縁を意味し、そのような因果にそむかない順当な縁を通して、次第に真実にめぐめることをいう。逆縁とは、挫折、失敗、悲しい別れのような出来事、また、人倫にもとるような事件が起こり、自己と相手の双方がともに深く傷つけあつてしまうような縁を意味し、しかしながら、悲しくつらい縁を通して、真実の慈愛にめぐめていくことをいう。

阿闍世の悲劇も、またそれに相通じるような韋提希や提婆達多の悲劇も、生きる意味とは何かについて考えさせる重要なメッセージを秘めている。親鸞は、悲劇の意義について、次のように記している。

「浄邦縁熟して、調達（提婆達多）、闍世（阿闍世）をして逆害を興せしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。これすなはち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、まぎしく逆謗闍提を恵まんと欲す。ゆゑに知んぬ、円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑を除き証を獲しむる真理なりと。」（『教行証文類』総序 註釈版聖典131頁）

〈現代語訳〉

「浄土の教えを説き明かす機縁が熟し、提婆達多が阿闍世をそのかして、頻婆沙羅王を逆害させた。そして、浄土往生の行業を修める正機が明らかになり、釈尊が韋提希を導いて阿弥陀仏の浄土を願わせたのである。これは、権化の仁、すなわち、菩薩たちが人間の姿をとって、苦しみ悩むすべての人々を救い渡そうとしたのであり、また如来が慈悲心から、五逆の罪を犯す

ものや、仏の教えを誹謗中傷するものや、さとりを求める心のない一闍提に、恵みを施そうと思われたのである。したがって、このように知ることができ。あらゆる功德を円にそなえた名号は、悪を転じて徳に変える正しい智慧のはたらきであり、得がたい金剛の信心は、疑いを除き、さとりを得させる真理であると。」

「彰といふは、如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す。達多（提婆達多）・闍世（阿闍世）の悪逆によりて、釈迦微笑の素懷を彰す。韋提別選の正意によりて、弥陀大悲の本願を開闡す。」（『教行証文類』化身土巻 註釈版聖典382頁）

〈現代語訳〉

「彰というのは、阿弥陀仏の広く大きい願いをあらわし、あらゆるものが等しく往生する他力の一心を説きあらわしている。提婆達多や阿闍世のおこした悲しい悪事を縁として、釈尊は慈愛に魅した微笑をたたえながら、浄土の真実に満ちた微笑をたたえながら、浄土の教えを説き、釈尊の本意を示し、韋提希が悲しみのなかで、とくに阿弥陀仏の浄土を選んだ真意を因として、阿弥陀仏の大いなる慈悲の本願を説き明かしたのである。」

「浄土の縁、熟して、調達（提婆達多）、闍王（阿闍世王）をして逆害を興せしめ、濁世の機を憫れんで、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。つらつられを思ひ、静かにこれを念ずるに、達多・闍世、博く仁慈を施し、弥陀・釈迦、深く素懷を顕せり。……聖権の化益、あまねく一切凡愚を利せんがため、広大の心行、ただ

逆悪闍提を引せんと欲してなり。」(『浄土聞類聚鈔』註釈版聖典483-484頁)

〈現代語訳〉

「提婆達多と阿闍世が五逆の罪を犯した悲劇は、浄土の教えを説く縁が熟したときとなり、汚れ濁ったこの世界に住む人間を哀れんで、釈尊は韋提希に安らかな浄土を選ばせたのである。よくよく思いを深め、静かに振り返ってみると、提婆達多と阿闍世は、あまねく広く慈しみと恵みを施し、阿弥陀仏と釈尊は、深く心の底にあつた真意をあらわしたのである……

「聖」なる仏と、「権」なる仮に人の姿をとつて衆生を導く菩薩(すなわち、提婆達多・阿闍世・韋提希たち)の救いは、すべての愚かなる凡夫を救うためであり、広く大きく、限らない徳をそなえた他力廻向の信心と念仏は、ただ五逆や誹謗正法、一闍提の救いがたい悪人を真実に導こうとするためである。」

「弥陀・釈迦方便して

阿難・目連・富楼那・韋提

達多・闍王・頻婆沙羅

耆婆・月光・行雨等

大聖おのおのもろともに

凡愚低下のつみひとを

逆悪もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり

釈迦韋提方便して

浄土の機縁熟すれば

雨行大臣証として

闍王逆悪興ぜしむ」

〔浄土和讃〕(78)-(80)註釈版聖典(570頁)

〈現代語訳〉

「阿弥陀仏と釈尊は、方便して仮の姿をとり、阿難・目連・富楼那・韋提希・提婆達多・阿闍世王・頻婆沙羅王・耆婆・月光・行雨などになられた。

大いなるこれらの聖者たちは、愚かな凡夫、苦しみの大海に沈む罪びとたち、そして、五逆や十悪を犯した救いがたき悪人を摂取して見捨てない仏の願いのなかに導きいれられたのである。

釈尊は韋提希の苦しみに寄り添い、浄土教を信受するにふさわしい機縁が熟した。また同じように浄土教を説かれる縁となったのが、阿闍世をめぐる王舎城の悲劇である。提婆達多が阿闍世王をたぶらかし、父が阿闍世を殺そうとしたという過去の因縁を語ったときに、雨行大臣は、提婆達多の言うことは真実であると証言し、父王を殺すように勧めた。こうして阿闍世王は、父の頻婆沙羅王を逆害してしまった。」

このように韋提希をはじめ、頻婆沙羅王や提婆達多や阿闍世、耆婆および大臣たちが、凡夫ではなく、本来は、智徳円満の菩薩、権化の仁であつて、仮に姿を変えて女性や王、大臣になったという見方は、『大方広如来不思議境界経』、『報恩経』、『大雲経』、『普超三昧経』、『心地観経』などに見られ、浄影大師慧遠、天台大師智顗などもこの見方をとる。

これに対して、善導は、『観無量寿経』に、

「汝はこれ凡夫なり。心想羸劣にして、いまだ天眼を得ざれば、遠く観ることあたはず」(真聖全

1-51頁。註釈版聖典93頁)

と説かれている文章に基づいて、

「まさしく夫人は凡にして聖にあらず」(『観経四帖疏』序文義定善示観縁 真聖全1-495頁。七祖注釈版390頁)

と記し、韋提希などを実の凡夫としてみ、心の弱い凡夫のために説かれた教えであると理解する。

このような多くの見方があるなかで、親鸞は、王舎城の悲劇が、表層的には、実の凡夫の苦しみと救いをあらわしているが、思想的には、仏、菩薩が仮に姿を変えて韋提希や阿闍世などになり、愚かな悪人を浄土真実に誘引するがために説かれたとしている。

したがって、第一に、現実として、阿闍世を初めてする王舎城悲劇の登場人物は、私たち自身と同じ凡夫として描かれている。人間は、貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱につねに揺り動かされ、人を疑い、自己の固定観念に執着し、徒党を組み、怨みを結んで衝動的に人を害するような愚かな存在である。世俗の汚れにまみれて、心性の清らかさを失ってしまった凡夫である。そういう人間の嘘、偽りに満ちた悪の姿を、阿闍世を初めとする歴史上の人物がそれぞれに明示している。そして、親鸞は自己の内面の中に、阿闍世たちに見られるような愚かさや罪を見出したのである。

第二には、宗教的象徴として、阿闍世を初めてする人物は、権化の仁、菩薩として描かれている。阿闍世、韋提希と頻婆沙羅、提婆達多と大臣たち、耆婆と釈尊すべてが、私たちに、真実の月を指し示してくれる存在(月をさす指)であり、真実に生き

る意味(義)を開示してくれる存在である。阿闍世は、身近な両親に憎しみを抱きながらも、寂しく悲しい姿をみせ、罪を犯したことを悔いて、救いを真剣に求めた。その阿闍世の姿が、親鸞にとつて、救いの道を求めている自分自身であったのである。

このように阿闍世の姿は、物語を読んでいる自分自身と二重写しになり、物語を通して自分自身を知ることができる。物語を縁とし、真実の慈愛を知り自己を開示する。そこに物語解釈の意義があるといえるだろう。

最後に、この物語を通して学んだことを、もう一度まとめてみたい。

アジャセ王のように、大きな過ちをおかしたとき、人はその罪をどのように受けとめればいいのか。

そのとき、どれだけ言い逃れしてみても、誰にかばつてもらつても、過ちを犯して人を傷つけた真実は、その本人が知っている。したがって、自分が犯した過ちを罪としてありのままに認め、誠実に慚愧することこそが、罪を負った人間の選ぶべきただひとつの道である。

その一方、過ちを犯した人間の更生を見守るものは、罪がどれだけ憎くとも、その人そのものが邪悪であると決め付けてはならない。縁起思想からみれば、アジャセ王の犯した罪は、さまざまな原因と条件が織り重なって生じたものであり、父や母、占い師、ダイバダッタなどの人々の罪と連鎖していた。個人の罪は、その人を取りまく人々の罪でもあり、広くは、同じ時代に生きる人間の罪と悲しみである。人間は相互につながっている。だからこそ、人間は相手の罪をもに見つめ、過ちを繰り返さ

ないように努力し、自らも一切のものも幸せになる未来を切り開いていく必要がある。

釈尊のアジャセ王を最後まで信じる願いが、ついには、彼を思いやりのある人間へと成長させた。この仏の願いこそが、罪を犯した人間を救う力となる。仏は、あらゆるものを育む母なる大地のように、さまざまな河を受け容れる大いなる海のように、そして厳しさと願いをもった父のように、何もかも受け容れる母のように、現にこの通りのどうしようもない自己を抱きとる。過ちだらけで、悲しみつつばいの自己が、そのまま、仏の慈悲に抱かれているのである。このように、真実にであうとは、決して見捨てることのない仏の願いが自己の心に満ち満ちることであり、同時に、その限りなき願いに動かされて、自らの罪を心から慚愧することである。

仏に願われ、信心に生きるということは、自己自身の世界が大きく広げられることである。それまでは見えていなかったものが見えてくる。それが仏の願いに育まれ、仏の慈悲が満ちた信心である。仏の慈悲、他力との出あい、それまでにもっていた束縛や執着から自由にさせる力となり、自らの愚かさを素直に受け容れて、明日に向かって生きる願いをうむだろう。

仏の本願他力は、あらゆるものが願われて存在している。つながっているという共感をうみだす。すなわち、「自分は一人ぼっちではない。愛され願われて生かされている」という慈悲のぬくもりを実感するとき、人は自らの罪の自覚を、過去への反省と、未来への生きる力に転じていくことができる。

逆縁から、人は多くのことを学ぶ。悲劇が、まことの慈愛にめざめる重要な縁となることがある。

逆境のなかで咲いた花は、可憐で、かけがえなく美しい。ちょうどその花のごとく、どうしようもない悲しみをかかえた人にも、月の光のような清らかな慈悲がそそがれて、深い優しきの芽吹くことがきつとあるにちがいない。

※鍋島先生が参考にされた他氏の論より

●帳偉(チャン・ウイイ)は、仏教における真の慚愧について、…阿闍世のレベルの慚愧は、私たちが自己の意思によって実現するのではないのです。ここで私はあらためて無慚無愧という言葉にこめられた親鸞聖人の気持ちを感じたい。無慚無愧とは、慚愧しよう、慚愧しない、慚愧できる、慚愧できないという人間の計らいが働いているかぎり、そういう自己意志が破られないかぎり、本当の慚愧にはならないことを意味するのではないでしょう。阿闍世の慚愧は、罪を縁として生じるものです。その罪を救済の機縁にするのは、如来の力です。その慚愧は、人間の意志によるものではなく、大いなる慈悲から賜ったものだとも言えましょう。

(阿闍世の慚愧と悲喜の涙(上))

●井上善幸も、次のように論じている。『信文類』の逆謗撰取釈では、『涅槃経』が長文にわたって引用されるが、懺悔による滅罪の功德を説く耆婆の言葉は削除されている。このことは、親鸞が滅罪の効力に頼ることを斥(しりぞ)けていることを示している。滅罪の効力に頼ることこそ、自らの善根による往生への道を頼ることであり、そしてそれは仏智を疑惑することにつながる、と親鸞は理解しているのである。…懺悔が「自己」の犯した罪障の滅助のはたらきを担っていくのに対して、慚愧は自らの行為に関する「他者」への配慮にその意義がある」(親鸞における逆謗往生について)